

---

# バカとセントリオ物語

黒炉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカとセントリオ物語

### 【Nコード】

N9150Z

### 【作者名】

黒炉

### 【あらすじ】

『バカとテストと召喚獣』と『ファイナルファンタジー12』のクロスオーバーです。ヴァン、パンネロ、バルフレア、フランは出てきません。レーザーは微妙……。それが嫌な方はブラウザのバックボタンをどうぞ。オリジナルモブやオリジナル装備、オリジナルキャラが多数登場します。ストーリーはFF12に近いです。

## プロローグ？ 呼ばれた者たち（前書き）

『バカとセントリオ物語』を読んでいただきありがとうございます。  
他作品と同時執筆なので、更新ペースは遅いと思いますがよろしく  
お願いします。

## ブローグ？ 呼ばれた者たち

「お邪魔します、明久君」

「いらつしやい姫路さん。上がったよ」

とある日曜日の昼、桃色の神の少女が吉井明久の家を訪れていた。<sup>バカ</sup>  
目的は勉強である。

『勉強』。

吉井明久が死ぬほど嫌いな言葉。

二人が通う文月学園は、世界的にも珍しい『試験召喚システム』を取り入れている進学校である。

生徒がテストの点数に応じた強さを持つ召喚獣を呼び出し、ポケットに入るモンスターやデジタルなモンスターのようにならば戦わせ、相手のクラスの設備を奪い取る。

それが『試験召喚戦争』略して『試召戦争』である。

文月学園はもう一つ、奇抜なシステムで有名である。それが、『クラス振り分け試験』。

学力に応じてクラス分けをし、上はAから下はFまで6つのクラスに分ける。Aクラスにはリクライニングシートにシステムでデスクという超豪華設備が与えられるが、Fクラスには座布団やらちゃぶ台やらと言う古き良き日本家屋を彷彿とさせる設備がプレゼントされたりする。

ちなみにFクラスに関しては、天井が蜘蛛の巣だらけだったり窓が割れて隙間風が入ってきたり畳が腐っていたり座布団から未知のキノコが生えてたり設備云々以前に衛生環境が最悪だった。

吉井明久はバカである。成績は学園最低レベル、バカの代名詞である『観察処分者』、バカな思考回路でFクラス入りを果たす。

姫路瑞希も明久と同じFクラスの生徒なのだが、それは彼女の成績が悪いからではない。成績だけで見るならば、彼女は学年2位の点数を持つ才女である（ただし、料理に関する常識が一部欠けていたりする）。

本来ならAクラス入りは確実だったのだが、クラスを決める大事な試験で高熱を出してしまい途中退席、再試験も認められずに無得点扱いでFクラス入りを果たす。

Fクラスは4月にAクラスに試召競争を仕掛けた。

明久が瑞希を本来いるべきAクラスへと連れていくためである。

だが、あと一歩のところまでAクラスを追いつめるもクラス代表の坂本雄二が最後の最後で詰めを誤りFクラスの設備はちゃぶ台からミカン箱になった。

話を変えよう。姫路瑞希とはある学園代表のバカに恋をしている。

それも小学校のころから続くほどの一途な恋を。

しかしそのどこぞ羨ましいバカが世界でもトップクラスの鈍感だったため、いまだに実を結ばないのが現状である。

というよりは、吉井家の『女尊男卑』が災いして明久が『姫路さんが自分のことを好きになるわけがない』と決めつけているだけ（姉に「女性がアキ君を好きになることは決してありません。女である姉さんが言うのだから間違いありません」などと吹き込まれたのも大きい）なのだが。

「麦茶でよければあるけど？」

「ありがとうございます、明久君」

成績優秀才色兼備、たわわに実った双山の持ち主の美少女に想いを寄せてもらえるなんてなんて羨ま妬ましいんだこの野郎などと言ったところで明久の鈍感<sup>バカ</sup>が治るわけでもないのでスルー！。

「？ 明久君、これは何ですか？」

「ああ、それはP〇2だよ。さっき押入れを整理してたら出てきた。一世代前の奴だけどね」

普段ゲームをしない瑞希の目には、現在発売されているものよりも一世代前のものでも目新しく写ったのか、興味深そうに見つめている。

「……………やってみる？」

「ふえ！？だ、ダメですよ！！私は明久君に勉強を教えに来たんであつて、ゲームをしてしまつては……………」

「そんなこと言っているの瑞希？明久君と一緒に遊べるチャンスなのには？」

「ダメですよ瑞希。明久君に勉強を教えに来たんですから、ゲームなんかしてないで早く勉強に取りかかるべきです！」

「黙ってなさい天使！あの鈍感な明久君が遊びに誘ってくれてるのよ！断る理由がないの！」

「お黙りなさい悪魔！明久君はただでさえバカで成績が悪いのだから、勉強をきっちり教えなければいけません！」

『どーせ勉強したってバカのままよ!』

天使も悪魔も何気に酷いことを言ってるが気がつかない。

「(わ、私は……)」

『やっぱり明久君と遊びたいわよね?』

『勉強するべきですよね?』

「(明久君と遊びたい!!)」

『いよっしゃー!』

『な!?!』

「(ごめんなさい天使さん!!)」

『ちよ、瑞希iiiiiiiiiiii……』

『お、音速で飛んでった……』

心の中の天使をぶん投げ明久の方を向く瑞希。

「……ちよっただけですよ」

恋する乙女の心は強いのである。

「えっと、すぐに出てくるのはこれくらいかな」

明久が自室から引つ張り出してきたのはゲーム機に対応しているソフットの山。

「こんなにあるんですか？」

「しまつてあるのも含めたらもつとあるよ」

吉井明久は一人暮らしで、仕送りのほとんどをゲームや漫画に使っている。

「どれがいい？」

「えっと、どれがどういうゲームなんですか？」

ゲーム知識がない瑞希はどのゲームがどんなゲームなのかさっぱりで、明久に質問する。

「えっとね、これがレースゲームで、これが格闘ゲームで、これがパズルゲームで、これは……何でもない」

「？ どうしたんですか？ 明久君」

明久がとっさに隠したのはエロゲーだ。

「何でもないよ。すっごい怖い奴」

「そ、そういうのはちょっと……」

怖いものが苦手な瑞希はホラーゲームができないと判断し、ホラーとエロゲーとギャルゲーを避けていく明久。

途中エロゲーを瑞希に見られそうになったが回避した。

「どっついうのがいい？」

大体の仕分けが終わった明久が瑞希の方を向くと、一つのパッケージを悔いるように見ていた。

「姫路さん？」

「ふえ！？は、はい、なんですか!？」

「それがいいの？」

瑞希が持っていたパッケージに描かれていたのは、二本の剣を持った鎧騎士。

「は、はい。なんだか面白そうだったので……」

「でもそれ、一人用のゲームだよ？」

「そうなんですか？」

基本RPGは一人プレイなのだがゲーム知識がない瑞希は当然そんなことは知らなかった。

「姫路さんがやってみたって言うならいいけどね」

「は、はい。これがいいです」

明久は瑞希からパッケージを受け取ると中からディスクを取り出しゲーム機に読み込ませる。

「（明久君と一緒にゲーム……）」

「？　なんか言った？　姫路さん」

「な、何でもないです」

会話をしているうちに読み込みが終わり、ゲームが始まる……はずだった。

「あれ？　始まんない……壊れてるのかな？」

一向に画面が変わらず真っ暗なままの画面を見て、明久がリセットボタンを押そうとしたが、

「うわっ！」

「きゃあー！」

突如、画面から強い光が放たれ明久と瑞希はとっさに目を覆う。そんな中、声が聞こえてきた。

『………汝、イヴァリースを救う者か………』

「!? な、何ですか!?今の!?」

「わ、分かんないよ!」

さらに光が強くなり、何も見えなくなる。

数秒後、光はおさまった。

が、そこにいたはずの二人の姿はなく、電源の切れたゲーム機とテレビがあるだけだった。

## プロローグ？ 砂漠に落ちた二人

少年は砂漠にいた。

黒髪を少し伸ばしているその少年は、砂漠の丘にいた。

少年の行きつけの酒場のトマジという男が、行商人を襲われて品物が届かず困っていた。そこでその行商人を襲ったモンスター『はぐれトマト』をこの少年が討伐に来たのである。

町を出てすぐに目的のモンスターは見つかった。

このあたりの砂漠では見かけないモンスターだ。人形の頭を牙を生やしたトマトの様なものに変えたモンスターで、あまり強くはなさそうだった。

見た目通りそこまで強いわけでもなく、簡単に追い詰めたが、あと一步と言つところで丘から飛び降りられ逃げられてしまった。

「……下か。面倒だが仕方ないか」

仕方なく少年は迂回して丘の下まで降りる。  
はぐれトマトはまだそこにいた。

武器である刀を構え、はぐれトマトに飛びかかる。

一瞬、反撃されそうになったが、ギリギリでかわしはぐれトマトを縦に真っ二つに切った。

「こんなものか。トマジに報告して帰ろう」

刀を背負い（長い時間背負わないと邪魔になる）、帰ろうとしたところで異変に気づく。

普段の砂漠ではありえないほどに、モンスター、『ウルフ』が集まっている。

それも、自分を囲んでいるわけではなく、別の何かを。

ウルフの群れの中心に目をやると、そこには一人の少年と一人の少女がいた。

「いたた……、姫路さん、大丈夫？」

「はい、私は大丈夫ですけど……」

気がつくのと二人は、砂漠のど真ん中にいた。

「あれ……？確か、僕たち家でゲームしてたような……？」

「吉井君、ここはどこなんです……？」

「僕にも分からないよ……なんか見たことはあるけど……」

辺りを見回す明久。  
周囲には見たことのない植物。  
遠くには大きな建物が見える。

「とにかく、あの大きな建物の方まで行ってみようよ」

「そうですね、もしかしたら誰かいるかもしれないですし」

いつまでもこの砂漠には干からびてしまう。とにかく歩きだす二人だったが、

「吉井君……」

「？ どうしたの、姫路さん……!？」

気がつくと、周囲を子供くらいの大きさはありそうなオレンジと白のオオカミのような生物に囲まれていた。

「吉井君……」

「分かった……。ここ、FF12の世界だ……!」

明久と瑞希を囲んでいる生物は『ウルフ』。FF12に出てくる雑魚モンスターで、明久たちがいる場所は『東ダルマス力砂漠』という場所だった。

「それって、ゲームの世界ってことですか？でも、なんで……」

「わかんないけど。相当やばいかも……」

ウルフの群れの中に、一際大きいウルフがいた。下手をすれば人間の大人よりも大きいかもしれないくらいの大きさだ。そのウルフ、『ウルフリーダー』は何匹かのウルフに指示を出す。

「ウォーン!!」

一匹のウルフが雄たけびを上げ、瑞希に襲いかかる。

「危ない、姫路さん!!」

「きゃっ!!」

明久は瑞希を突き飛ばすが、代わりに怪我を負ってしまう。

「よ、吉井君!!」

「大丈夫だよ、これくらい……それよりも、逃げなきゃ……」

ウルフの群れはじりじりと距離を詰め、逃げ場をなくそうとしてくる。

ウルフリーダーが再び指示を出そうとしたその時、突然ウルフリーダーを炎が襲った。

「な、何!?!」

「ゲウウオア!?!」

司令塔がやられたせいなのか、ウルフたちが動揺しだす。そこへ、一人の少年が飛び降りてきた。

「君たち、大丈夫かい!？」

少年の服装は、現代の日本では見られないようなものだった。金属にも見えるのベストの様なものだけを着ていて、上半身はほとんど裸だった。

「よ、吉井君が、け、怪我を……!!」

「分かった。これを使うといい。応急処置だが何もしないよりはいいはずだ」

そう言つて少年は瑞希に塗り薬を渡し、ウルフの群れに向かって走つていく。

少年は持っていた刀を棒に持ち替え、ウルフの群れを薙ぎ払つていく。

「おらあ!!」

司令塔であるウルフリーダーが完全に沈黙し、恐れをなしたのか残つていたウルフは逃げ出した。

実際に倒したのはほんの2、3匹である。

「す、す……」

明久も瑞希も、その姿に見とれていた。

「大丈夫かい、ウルフの群れに襲われるなんて災難だったな」

「あ、ありがとうございます」

「おかげで助かりました」

「気にしないでくれ。こっやってモンスターに襲われている人を助けるのも、俺の仕事の一環だからな」

少年は座り込んでいる明久に手をだす。

「ほら、早く行こう。あくまで応急処置だ。安全な場所ですっかり手当てをした方がいい」

「ど、どうも」

明久は少年に肩を貸してもらい、瑞希も二人についていく。

「ところで君たち、名前は？」

「あ、僕は吉井明久です」

「姫路瑞希です」

「ヨシイアキヒサ？ヒメジミズキ？変わった名前だね。俺はハルヴィーネ。気軽に『ハル』でいいからな。よろしく、アキヒサ、ミズキ」

戦闘描写ってのは果てしなく難しい……

反応次第では連載かするやもしれぬ。

## クラン加入編？ 狩る者達の集う館

「しかし君たちは奇抜な格好をしているな」

「え？そ、そうですか？」

場所は『王都ラバナスタ』のダウンタウン。

ハルが自宅で明久の手当てをしながら明久と瑞希を見て言った。

「そこまで厚着をしている人は初めて見た。というか……変わった服を着ているな？」

「えつと……僕たちからしてみればハルさんの方が奇抜な格好なんですけど……」

さつきは突然の事態で全く意識していなかったがハルの格好はほとんど上半身全裸である。

瑞希は目のやり場に困るよう目でそらしつ続けている。

「とにかくこの街でその格好は目立つ。着替えた方がいいんじゃないか？」

「で、でも、僕たち着替えなんて持ってないですし……」

「このままでいいです！」

「色気の強いのもあるんだがな……」

「是非着させてください！」

「姫路さんっ!?!」

最初は乗り気じゃなかった瑞希もハルの一言でノリノリに。

「と、とにかく着替えた方がいい。ただでさえ君たちはこの街では危険なんだ。目立たない方がいい」

「危険ってどういうことですか?」

ハルの言葉に明久が聞き返す。

「あー……その前に敬語をやめてもらっていいか?君たちは16だろう?俺だってこれでも16だよ」

「え!?!と、年下!?!」

「全然見えないです……」

「敬語でなくてもいいし、気軽に呼び捨ててくれて構わない」

こういう喋り方や立ち振る舞いもハルを大人っぽく見せる要因の一つなのだろう。

同じ16歳でも自分とはえらい違いだ。と明久は若干落ち込む。

「で、続きなんだが……君たちは異世界から来たんだろう?服装を見れば分かるよ。最近多いんだ」

「そうなんですか?」

「ああ、ここ1ヶ月は特に多い。そのほとんどがナブディスやゴルモア……人里離れた魔物の巣窟に落ちてくることが多いんだ。君たちはラッキーだったんだよ」

ハルの話に明久と瑞希はもしハルが来てくれなかったらと想像して青くなる。

ラッキーだったといわれても、もしハルが来てくれなければ今頃自分たちはウルフの群れに殺されていたからだ。

「危険なのは、この街は帝国の管轄下だからだ」

「帝国……ですか？」

「アルケイディア帝国……です……じゃなかった。だよね？」

「アキヒサは詳しいんだな。ああ、アルケイディア帝国だ。帝国に見つかるとまずい」

「なんでですか？」

「帝国は……奴らは何かを企んでる。前にもこの街にいた異世界の人間が帝国軍に連れて行かれた」

明久と瑞希はハルの説明を聞いて、自分たちの置かれた状況を再認識する。

「とにかく目立たないようにするのが大事なんだ。それから己を鍛えること。強くなることだ」

「強くなるって？」

「まあ漠然と言われてもイメージはできないよな。これから案内するよ。俺の仕事場に」

明久はハルの服を借り、瑞希は衣服店で安物の服を買った。

この世界の服は男物も女物も露出度が高く、瑞希のたわわに実った双山が無駄に強調されてしまい明久が赤い噴水を作り出したのは言うまでもない。

3人がはラバナスタ上層の西部、謎の建物の前まで来ていた。

「……………」

「どうした？ミズキ」

「姫路さん？」

来ていた……………のだが、瑞希が建物の前で止まってしまった。

「……………変なのがいます」

「え？ああ、バンガか」

瑞希は建物の前にいるトカゲモドキのような生き物におびえてしまっ

ている。

「気にすることはない。いい人だから」

「大丈夫だよ。ハルがいるし」

「ほ、本当ですか……?」

「ああ、いざとなったらアキヒサが庇ってくれるんだろ?」

「なっ、何を言ってるんだよ!?!」

「冗談だ。ほら、行くぞ」

「明久君……//」

「姫路さん?!?!」

「お前らな……はあ」

冗談のつもりでハルの一言だったが、瑞希のスイッチが入ってしまった半トリップ状態に。

明久は鈍感ゆえ瑞希のリアクションを理解できず驚いてしまう。

そんな傍から見ればバカツプルを見て思わずため息をついてしまうハル。

「おう、ハル。あの二人は?」

「さっき保護したんだ。異世界からきたみたいで。ちゃんと指示通り保護しましたよ」

「ああ、中でリーダーに話つけといてくれ」

「了解です。おい、こっちだ」

ハルは入口の警備員のバンガと話をする、落ち着いたところで明久と瑞希を呼ぶ。  
が……

「明久君……その、えっと……」

「姫路さん……まさかハルのことが……いや、でも領ける……」

瑞希は未だにトリップ状態から抜け出せず、明久は明後日の方向へ勘違いをしている。

「何やってんだあの二人は……？」

「異世界の住人ってのはバカなのか？」

「知らないですよ……」

バンガは興味深そうに二人を見つめるがハルは気苦労が増えたのではないかと憂鬱になる。

ハルは二人の元まで歩いて行って……

「おい。……おい！」

「ふえ！？は、ハルさん！？」



クラン加入編？ 狩る者達の集う館（後書き）

感想いただけると嬉しいです。

クラン加入編？ その人の名は（前書き）

キャラ崩壊注意です。（とくにモンブランが）

## クラン加入編？ その人の名は

「クポ？見ない顔クポ」

明久と瑞希がハルに連れられて二階部分に上がると、ウサギの様なリスの様な生物に声をかけられる。

明久はかつてゲームで見たことがあった故にさほど驚かなかったが、瑞希は見たこともない生物におびえを見せ明久の後ろに隠れてしまふ。

「モグはこのクランセントリオのリーダー、モンブランクポ。よろしくだクポ」

「ど、どうも」

「モンブランさんは凄い人なんだ。かつては凄腕の空賊として活躍していた時期もあったんだ」

明久はゲームとは違う設定に首をかしげるが、少し違う部分もあるのだろうと勝手に納得する。

「か、かわいいです……」

「クポ！？モグが、モグがかわいい……！？」

瑞希がポツリとつぶやいた一言にモンブランが過剰に反応し、プルプルと震えだす。

「（ハ、ハルさん。私、何かいけないことを言っちゃったんでしょ  
うか……？）」

「（分からない。モンブランさんが何をいわれると起こるのかなん  
て、知らないし……）」

ハル、明久、瑞希だけでなく、辺りにいるクランメンバー全員が息  
をのむ。

凄腕の元空賊が本気で怒ったとき、自分たちでは手に負えないから  
だ。

モンブランは手すりから降りるとテクテクと瑞希に足もとまで歩い  
ていき……

ピョン！とジャンプして……

「今からここがモグのニューポジションクポ！」

瑞希の腕の中に飛び込んだ。

「え？え？」

「クポ！なかなか居心地がいいクポ！…みんなどうしたクポ？」

モンブランが瑞希の腕の中で愛らしく抱かれていると、それを見て  
いた者は明久やハルを含めて全員ずっこける。

「……絵になってるよ、ハル」

「知らねえよ。もう知らねえし……」

モンブランに限らずモーグリ種はもともと見た目が可愛いので  
瑞希が抱くと人形のようになってしまう。  
それが瑞希の容姿と相まって余計に可愛らしくなっている。

「モンブランさんってさ……結構残念な人？」

「いや、普段はもっとカッコいいんだが……」

既に瑞希と和気あいあいと話し込んでいるモンブランを見てハルは  
自分の尊敬する人の真実を知ってうなだれる。

「で、君たちは一体誰クポ？見たことがない顔だクポ」

「今までのあの弾む会話の中で一回もその疑問が出なかったんです  
かモンブランさんは!？」

明久は唐突に理解した。

ああ、ハルっていつもツッコミなんだ、と……。

「モグがモンブランクポ。ハルから話は聞いたクポ。向こうに帰れ  
るメドがつくまでは、このセントリオで自分を鍛えるといいクポ」

「あの、鍛えるって言うても何をすれば……」

「誰かと組み手をするもよし、砂漠の魔物と戦うもよし。色々な方法があるさ」

「主にはハルを頼ればいいクポ」

「全部俺に押し付けですか！？他にもたくさん居るでしょうよ!？」

セントリオ名物、ハルとモンブランのコントが炸裂（笑）

「まあ、武器や防具のことについても俺が面倒を見よう。君たちの様な異界の者を保護するのは、俺達の決まりだからな」

「決まり、ですか？」

「ああ。各地のレジスタンス組織が取り決めてるんだ。『怪しげな実験をする帝国に彼らを渡すな』ってさ。実際は、巨大な帝国に対する嫌がらせの一つさ」

「そうなんだ……」

それでも、そういう裏の事情があっても、このセントリオの人たちが明久と瑞希に友好的に話しかけてくれることには変わりなかった。

「キミたちも、このクランセントリオのメンバーとして活動してもらおうクポ。基本はハルと一緒に行動して、ノウハウを学んでくれればいいクポ」

モンブランは大まかな説明だけすると、また階下を見下ろすために元いた場所に戻ってしまう。

「それじゃ、まずは装備を新調しに行こうか。俺も防具を見直したいしな」

ハルが明久と瑞希を連れてセントリオから出ていくと、モンブランは不安そうな瞳で3人を見舞っていた。

## キャラ紹介 ハルヴィーネ

名前：ハルヴィーネ（フルネーム不明）

性別：男

年齢：16歳

現在装備：紅無<sup>くれない</sup>、スケールアーマー、サーリット、オルアケアの指輪

克蘭セントリオに属するモブハンター。

東ダルマスカ砂漠にてモブ『はぐれトマト』を討伐中にウルフの群れに囲まれている明久と瑞希を発見し、救助する。

セントリオに加入した明久と瑞希の教育係をモンブランから任される。

ハンターとしての腕はなかなかで、モンブランやセントリオメンバーからの信頼は厚い。

取得済み魔法

ファイア

サンダー

ブリザド

ケアル

ポイゾナ

取得済み技

盗む

ライブラ  
応急処置  
密漁

取得済みライセンス

軍刀装備

剣装備 1

刀装備 1

重装備 1、 2

アクセサリ装備 1、 2

白魔法 1、 2

黒魔法 1、

盗む

ライブラ

応急処置

密漁

HP + 50

クラン加入編？ 武器とは己の心を映す鏡である（前書き）

ノッポガキさん感想ありがとうございます！

クラン加入編？ 武器とは己の心を映す鏡である

「つまりだな、片手剣は軽いし盾が装備できる。弓は遠距離だからモンスターに狙われにくく……」

「ま、待って。武器について豪語しないで」

セントリオを出たハル、明久、瑞希がまず向かったのは『アマルの武具ショップ』。

王都ラバナスタで一番の品揃えを誇る、ハンター御用達の店だ。

「そうか？これからモブの討伐に行くんだから、装備は新調しなければダメだぞ。あ、この刀よさそう」

「待って、全てにおいてついていけない」

言ってるそばから自分の武器を選び出す始末である。

明久と瑞希は理解した。

「（この世界の人たちって、どこかでおかしい……！）」  
「もっともである。」

やはりバカテスはバカテスだった。

「ていうかモブの討伐なんて聞いてないけど!？」

「ああ、今言ったからな」

「言えよもつと早く！」

まったくである。

「あの、モブってなんですか？」

「モブって言うのは、民間人や軍人が登録したお尋ねモンスターのとき。行商人を襲撃されたとか、身内の敵を打ってほしいとか。中には、自分じゃ倒せないけど見栄を張りたいから手伝ってほしいなんてのもいるな」

「そうなんですか」

「いやいたけれども！！」

かなりゲームをやりこんだ明久である。

「話を戻す。俺としてはアキヒサには片手剣、ミズキには弓がお勧めだな。片手剣は機動性が高いし、弓なら遠距離から狙えるから前衛より敵に狙われにくい」

「えー、僕としては両手剣とかがいい……」

「そんな金はない」

「リアルだねそこ！？」

あまりにも問題がリアルすぎた。

「あの、私はそういうのが分からないのでハルさんにお任せします

ね

「ああ。こう見えても見立ては得意だ」

「この人ツツコミじゃないのかな……？」

「しばらくお待ちください」

「どうだ？」

「うん、いい感じ」

「ちょっと怖いです……」

ハルの数秒に及ぶ考察の結果、明久は『ロングソード』、瑞希は『ショートボウ』になった。

「1200ギルになります」

「高い買い物や……」

ハルの財布が少し軽くなった。

防具は簡単に決まり、明久は力が上がる『サーリット』と『ブロンズアーマー』を、瑞希は体力が上がる『レザーヘッドギア』と『ブロンズの胸当て』を購入した。

「なんだか力がみなぎってくるよ」

「私もなんだか体が軽くなった気がします。でも、ちょっと胸のあたりがきついですけど…」

「そういう風に作られてるからな。それとアキヒサが死にかけてるからミズキは変なこと言うなよ」

明久の顔の周囲が赤く彩られた。

「ここだ」

「『砂海亭』…ですか？」

「酒場だ」

「ええ!？」

「大丈夫だ。酒以外にもいろいろある」

明久はもとより知ってるため驚かないが、予備知識のない瑞希にとっては初めての酒場でびっくりしている。

「おいトマジ、トマト野郎をぶっ飛ばしてきたぞ」

「お前は普通に『はぐれトマト』って言えないのか……」

ハル達が店に入ると、奥から若い男が出てきた。

「コイツは『トマジ』。この店の従業員で、裏では人に言えないようなことをしてる」

「な、なにをしてるんですか!？」

「やめろ!確かに秘密ではあるがやめろ!言い方がよくない!」

「トマジさんって、確かクランに入れそうな人を探してるんですけど」

「……なんで知ってんのこの坊主」

「しるか。やたらと詳しいんだ。異界の人間なんだがな」

トマジは明久の知識に感心し、驚愕するが明久はきよとんとしており、

「……まあいいか。ハルが連れてきたってことは新人か?こっちにこい」

トマジは店の一角にある大きな掲示板の前まで明久と瑞希を連れていく。

「お前ら、名前は?」

「よ、吉井明久です」

「姫路瑞希ですっ」

「うし、ヨシイ、ヒメジ、よく聞いてるよ。これがモブの依頼を受ける『掲示板』で……」

「そこに出されてる張り紙を見てから依頼主の人に話を聞いて、モブを倒せばいいんですよね？」

「お前、本当に詳しいんだな……」

明久がトマジの台詞をさえぎって全てを説明してしまい、トマジはうなだれる。

「ま、いまヨシイが言ったことが大体すべてだな。ハルがいるからランクくらいは行けるんじゃないか？」

「そこまでじゃねえよ。つーか報酬よこせよはぐれトマジ」

「やめろ！はぐれトマトみたいに言っんじゃねえ！つたく……」

明久と瑞希が笑いをこらえているのを横目で見ながらハルにはぐれトマト討伐の報酬を渡すトマジ。

「今回はどれをやるつもりなんだ？」

「テクスタと花サボテン。二つ一気にこなす」

「おう、横着だな」

「二人が一緒だからな」

ハルは明久と瑞希を見て言うが、二人は自分達にそこまでの技量はないとごまかす。

「よし、んじや言ってこい。テクスタのほうの依頼人はそこにいるガスリって男だ」

トマジは掲示板のすぐ横で呑んでいる男を指さしながら言う。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9150z/>

---

バカとセントリオ物語

2012年1月2日02時50分発行